『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

いのちみな生きらるべし

中川　皓三郎

ご紹介にあずかりました中川でございます。真宗大谷派が直接経営しております大谷専修学院という学校に勤めております。家族ともども寮生活をしていまして、その中でいろんな学生の人たちと親鸞聖人の教えを学んでいます。今日、折角こういう機会を与えていただいたのに、どのようにきっちりとしたお話ができるか非常に心もとなく思っています。けれども、私は、皆さんの代わりに生きることはできませんし、ただ縁になることができるだけですので、たとえそれが悪い縁であっても、そのことを通して皆さんがいろいろなことを考えたり、感じたりしていただければと思うのです。

今日は、「いのちみな生きらるべし」というテーマを出させていただきました。このテーマはヨーロッパの詩人でありますリルケという人のあの膨大な詩の中の、それこそ短い小さな言葉です。我々はこの現代という時代を生きているのですが、こういう現代社会の中でどう生きることが本当に生きることになるかということを、皆さんと一緒に考えさせていただきたい、学びたいと思っています。

皆さんに「現代という時代、そして現代という社会をどう考えておられるか、どう感じておられますか」と聞けば、いろいろな答えが返ってくると思います。また逆に、何を面倒なことを言っているのかということになるかもしれません。しかし、好むと好まざるとにかかわらず、私たちは時代、社会の子どもであるわけです。ですからこの時代、社会をつくっているのが実は、この我々一人ひとりだといってもいいと思うのです。その中で我々は自らの幸せというものを求めて生きているのですが、実際に自分自身がどういう生きざまを表して生きているかというのは、なかなかわからないということがあります。もっと言えば、そういう自分自身が問題になるということが、非常に困難な時代だといえます。現代のそういう時代、社会が表す姿を通して、やっと、かろうじて自分自身が問題になるということがあるのです。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

いのちみな生きらるべし

先程も学長先生とお話ししていたのですが、この七月の始めに、四十歳のお母さんが子ども三人を残して行方知れずになり、実際には一番小さな子どもさんは亡くなっている。そして昨日、新たにわかったことですが、その二歳の女の子が言うことをきかないということで、一番上の十四歳の男の子が友だちと二人でその子を殺していたということが明らかになってきました。そういう身近に起こってくる出来事一つを通しても、我々の時代は、非常に得体の知れないものを持っていることがわかります。

実は私は今、山科に住んでいるのですが、一昨日、近くの山科団地という大きな団地で、やはり中学生の子どもさんがシンナーを吸っていて、何階からか落ちて亡くなられたというようなことも、身近に起こっています。そういう、新聞の社会欄で目に触れる記事を通して、我々はどういうふうに生きているか、どういう問題があるのかということを思うのです。

今日は、今から三年ほど前、昭和六十年の十二月に自ら命を絶った中学生の女の子が残していった言葉を手掛かりにして、我々がどういう問題を持っているのか、そしてそのことはどう解けていくのかということを一緒に考えていきたいと思います。

この中学三年生の女の子はこういう言葉を残しています。

学校なんて大きらい
みんなで命を削るから
先生はもっときらい
弱った心を踏みつけるから

もちろん、直接には遺書というわけではないのですが、学校の作文に書いた言葉です。恐らく、皆さんと同世代の方だろうと思うのですが、その方がこういう言葉を残された、そして自ら命を絶たれたということがあるのです。

私はこの言葉を新聞でみた時に、非常にするどい衝撃を感じました。私自身、二十年ほど前、昭和四十二年に大学を出て、一年間働いていて、そして生きていけなくなったということがありました。生きても生きても生きていることの手応えがないということの中で、何か逃れるような形で、大谷専修学院に学ぶということを始めたのです。ですからこの「命が削られる」という言葉に、私は、他人ごとでないものを感じるのです。そして本当に生きたいにもかかわらず生きられないという、そういう女の子の悲鳴を感ずるのです。藤原新也という小説家

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

が、シンナー中毒のことについて、現代を酸欠状態、つまり現代という時代、社会は呼吸ができない、それこそ池の中の金魚とか魚が水面でパクパクあえいでいるような状態であると押さえておられます。

皆さんは生きていることの手応えというようなものを日々感じて生きておられますか。その時その時にしなければならないことがありますし、やろうとすることもあるけれども、自分の生きていることの全体に本当に手応えというものを感じているという方はどれだけおられるでしょうか。

大げさな言い方ですが、現代という時代は、その時その時おもしろいこととか悲しいこととかつらいことはあるけれども、その全体に生きているという感じが持てないのではないか。もっといえば、皆さん本当にやりたいことがありますか。自分の一生をかけて私はこのことをやろうというものを持っておられますか。私自身、やはりそういうことをいつも思います。生きるということは、様々な困難の中で生きるわけですが、どんな困難にぶつかっても、それこそ絶望しないで自分はこのこと一つを実現していくのだと、このことを求めて生きていくのだというものを持っておられるでしょうか。

この中学三年の女の子は、別なところで、いろんな言葉で現代の学校教育を批判しています。こんな言葉もあります。「教師なんて信用できません。教えてくれるのは本音と建て前の使い分けぐらいです」とか、「学校の先生が持っているのは、人を測るための巨大なものさしです。」この巨大なものさしということと、命を削るということは、実は同じことを語っているのです。どういうことかと申しますと、学校ですから、試験をすれば必ず百点から零点まで成績がつくものです。ところが我々は、自分が百点だ、零点だ、六十点だと、ただそれだけではすまないのです。我々は必ず、百点を取れば喜ぶし、零点を取れば情けなくなるということがあります。隣に座っている友だちの顔を見ても、自分と同じ人はいません。鼻の高い人もいれば、低い人もいる。また、背の高い人も低い人もいる。全部違うのです。ところが、実際に我々が隣の人を見る時にどういうふうに見るかというと、そこに必ず良し悪しをいってしまうということがあるのです。この良し悪しをいう、つまり試験なら百点を取った人は良い人だ。そして零点しか取れないということは悪いことだ、だめな人だと思ってしまうのです。百点を取った自分は他人に自慢することができるけれども、零点しか取れない自分は、他人に自慢できない。一言でいえばそういう自分であるにもかかわらず、その自分を自分が嫌うということ

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

が必ず起こってくるのです。そして良し悪しをいうということは、必ず良いものは取るけれども、悪いものは捨てるということになります。ですから、例えば人間関係でも、あの人がいい人だといえる限りは友だち付き合いができるのですが、一旦、あの人は嫌な人だ、あの人はだめな人だというふうに自分に見えてきますと、必ずその人と一緒にいられなくなる。

自分ということについていえば、必ずいろいろな姿、形、様々な違いを持って生きているわけで、それが事実なのです。ところがその事実に良し悪しで関わりますと、自分がいいと思える自分と、悪いと思える自分の二つにどうしても分かれてしまう。そして良いと思える自分は、「これは私です」と堂々と名のることができるけれども、自分でも嫌だなと思っている自分は、他人からそれを指摘されることを避け、そしてなんとかそういう嫌な自分を隠そうとします。できることならそういう自分を、なんとかして良いと思えるような自分になろうと一生懸命苦労するということがあります。大谷専修学院は真宗大谷派に属する学校ですが、その私どもの学校にも一時、例えば大谷大学に行けなかったとか、お寺が裕福でないとかで入学してくるということがあったのです。そういう人たちが沢山いる。真宗大谷派なら大谷派というところで、専修学院というものがどう見られているかということがあるわけです。皆さんならば

偏差値ということがあるでしょう。すると、自分の入学した学校が世間でどういう評価を受けているかということに非常に敏感だろうと思うのです。

これはもう何年も前の話ですが、私どもの学生が奈良へ遠足に行った時、たまたま私どもの学生と小学校の子どもたちが電車に乗り合わせたのです。学生とその小学生たちが非常に楽しく話している。ところがその子どもたちが、お兄ちゃんはどこの学校かと問うた。その時、うちの学生は自分がどういう学校におるかということを言えなかった。自分は京都の大谷専修学院というところにおるんだ、そしてそれは俗にいう僧侶の養成の学校だと事実を事実としてありのままに言うことができなかったのです。その時、それを見ておられた学院長、この方は七年ほど前に亡くなられましたが、帰ってから烈火のごとく怒られたのです。「自分自身の事実を事実として語ることができないとは何ごとか」と。

そこにやはり評価というものがあるのです。だから我々の学生も、あるところでは自分は大谷専修学院の学生だと言うことができるのですが、あるところではそれが言えないというようなことが起こってくるのです。

だから、良し悪しというものを気にして生きる限り、ありのままの事実を事実として認める

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

ことができないということが起こってくるのです。そういうふうに、同じ自分であっても、必然的にその自分が二つに分かれてしまうということにならざるを得ない。必ず我々は良し悪しにとらわれて、そこでいつも他人から自分自身を「出来るもの」と思われたい、良いと思われたい。そのように思っているということは、その中で良し悪しを分けている。

この女の子が、学校はみんなで命を削ると言ったことは、つまりいつでも自分をできるもの、よいものにしておかなければならない。いつでも評価を気にして、良し悪しにとらわれて生きることを意味します。そういう生き方をしているから必然的に「命が削られる」ということが起きるのです。ありのままの自分を自分と言えない、何か他人から評価されるものでなければならない、そういうふうに我々は思い込んでいる。だからそういうふうに生きれば、必ず我々は劣等感や孤独に苦しめられるということが起こってくるのです。

例えば、ヨーイ、ドンで走れば、速くゴールに着く人と、遅れてゴールに着く人が必ず出ます。二人肩を並べますと、背の高い、低いということは必ず出ます。それこそ姿・形・能力、全部違うのです。違うということが、実は命の姿なのですが、我々は必ずそれに優劣をつけてしまう。そしてどこまでも自分はその場で一番すぐれたものでなければならないと思ってしま

います。そういう思い込みの中で生きるのですから、事実を事実として生き切れない。

例えば、僕ははげてますでしょう。でも本人にはあまりはげているという意識はないのです。その証拠に、私の家の近くの中学校の生徒が、ときどき二階から私を見ていて「はげ！」と言うのです。そうするとムカッとします。二回くらいは辛抱できるのですが、三回目になるとちょっと無理です。すると、もう通りたくなくなります。また言われるのと違うか、と。

なぜそういう例を出すかというと、要するに、事実なのに事実を言われて自分自身なぜムカッとするのかということです。これは本当に不思議なことです。つまり自分自身がはげているにもかかわらず、自分自身がこのはげている事実を自分のこととして認められない。しかし、それをそうでないようにどれだけ装っても、嘘は嘘なのです。どれだけ言いつくろっても嘘は嘘で、全然変わらないのです。ですから、どれだけつらいことがあっても、事実を事実として生きるという生き方が、実は一番安定しているのではないでしょうか。恐らく皆さんも、大なり小なりそういう問題を持っておられると思います。ですから整形手術というような仕事もあるのです。つまり、別なものになっていこうとするのです。

命が削られるということは、事実を事実として引き受けることができないということです。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

そしていつでも「出来るもの」として、「評価されるもの」として、自分自身を生きていく。だから要らないところを削っていかなければならない。けれども実は、どれだけうまく装ってもどれだけお化粧しても、素顔は素顔です。

例えば、皆さんは光華女子大学の学生さんです。性別でいえば女性です。そういうふうに必ず決まる。つまり、そういう身を持って生きるということは、皆、決まっていることです。ところが我々は、あたかも自分がなんでもできるものであるかのように思って、その具体的にある事実をありのままに受け入れることができない。そうして自分を苦しめる。例えば生まれた環境が悪いとか、自分に能力がないからだとか、経済的に貧しいからだとか、そういうふうに思うのです。

ところがそうではないのです。実は能力のない自分を、そして自分の生まれた環境をそのまま自分のこととして認めることができないという私の心が自分を苦しめるのです。問題は外にあるのではなく、実は一番大きな、問題の根っこにあるものは、私というものなのです。先程、こういう私というものを中心にして生きていれば、劣等感と孤独の問題は解けないと申しました。夏目漱石の『心』という小説の中で、先生が若い友人に言っています。「平生、人は

皆善人なんだ。だけど、いざという時に人間は悪人になってしまう」と。ドストエフスキーがやはり『地下生活者の手記』の中で「自分が一杯のお茶が飲めれば、全世界が滅んでもいい」と言っています。

我々が「私」と言っている私は、そんなすごいものなのです。たとえ友だちであっても、そこに利害が入ってきます。一緒に生活すれば必ず損得ということが入ってくるのです。この「私」というのは、必ず他人と自分とを区別して、何よりもこれが自分だと思い込む。そしてその自分を中心にして生きようとするわけですから、先刻漱石が「平生は皆善人なのだけど、いざという時になれば悪人に変わってしまう」と言うように、ともに生きれば必ず利害の問題が出てきます。一つの物を二人一緒に食べることはできないという事がらが、現実にはあるのです。初めに紹介したお母さんでもそうです。子どものところに居ようと思うと、自分の好きな人のところには行けないのです。もしも本当に一緒に居ようと思うなら、好きな人とも一緒に居られるような環境を自分自身がつくって初めて成り立つことです。ところがお母さんは自分を選んでしまった。最後に、ぎりぎりになれば、どうしても自分を守ってしまうのです。ですからどれほど友だちだといってみても、実はある条件の中で成り立っているということにな

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

らざるを得ないのです。そこに孤独の問題があります。良し悪しという自分の都合で事実に関わるから事実から浮き上がってしまう。

我々がなんの疑いもなしに前提にしているこの私というものの正体をよく見、この私から解放されていないと、実は本当に手応えのある生き方はできないのです。つまり一言でいえば、良し悪しを言わない、選ばない、嫌わないということです。皆さんは、嫌いなことをなぜしなければならないのかと思われるでしょう。例えば私のところの寮生活は、朝の六時半に起きて、トイレの掃除とかいろいろします。テレビはありませんし、クーラーもありません。そういう生活環境は、皆からすれば非常につらいものです。「まあ一年だから辛抱しよう」ということなのですが、その一番ベースに流れているのは自分の嫌いなことをなぜしなければならないのかという疑問です。今、ここで本当に好きなことをしなさいと言えば、誰だって嫌いなことはしないでしょう。そういうふうな形で我々は、この私というものを前提にして生きています。我々が本当の意味で事実に立つことができるには、そういうふうに好き嫌いを言わない、良し悪しを言わないで生きていくことのできる自分というものが生まれてこないとだめなのです。それはどうして生まれるか。そこで今日のテーマに帰ります。

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

リルケはこの詩の中で、「あたかも牢獄を逃るるごとく、人は皆自己の前を逃れんとすれども、世におおいなる奇跡ありて、いのちみな生きらるべし」と言っています。つまり我々すべて人は、皆、この世の牢獄を逃れるように自分の前から逃れようとしている。仮面をつけなければならないということは、そういうことでしょう。ありのままの自分を見ることができない、受け取ることができない別の自分になろうとする。そういう形でみんな自分の前を逃れているというのです。ところがリルケは、この世におおいなる奇跡がある、と。つまり我々が生かすいのちは、さまざまな姿や形の違いを越えて、どのようないのちも生きられるいのちである、と。ですから、いのちには良し悪しがないのです。そういうことをリルケは「いのちみな生きらるべし」、つまりどのようないのちもみな生きることのできるいのちだ、と。本当にそうなのです。そういういのちがもし見えなければ、我々は最後は絶望です。そういういのちが見えなければいつも嫌われることを恐れ、びくびくして生きていかなければなりません。

我々がいつでも自分というものを前提にして、好き・嫌いと選んでいく、そういうところで生きる限り、絶対に事実を事実として認めることはできない。そして、一緒に生活している人についても、それこそ無条件に交わることができない。好きな人とは一緒に居られるけれど

『真實心』第十集昭和63年度1989年3月発行（京都光華女子大学）

も、一旦その人を嫌だと思えば、居られなくなる。そういう私であるのです。そういう私のまで生きる限りは、孤独と劣等感から離れることはできません。しかし、いのちみな生きらるべし、その事実を見よう、と。我々を生かしているいのちは、どんないのちも、生きることのできるいのちなのだ、みんなそういういのちを生きているのだ、そのいのちに目をとどめなさい、そして、そのいのちを生きるものになりなさい、ということなのです。

親鸞聖人が南無阿弥陀仏といわれるのは、我々一人ひとり、どのようないのちも生きることのできるいのちですよ、どのようないのちも本当に一つのいのちですよ、生きることのできるいのちですよということを、我々に教えてくださっている言葉なのです。我々がそういう言葉に触れて、そして自分自身、本当に無条件に生きることのできるいのちなのだということにうなずいていくことを通して、自分が自分になっていくということがあるのです。自分が自分になるということは、大変豊かなことなのです。そして、そのことを通して、日々出会う人と本当に親しい、無条件な交わりを拓いていく。

生きるということは、そういうことなのだということを、実は申したいのです。宮沢賢治が亡くなる一週間ほど前の手紙に「苦しまなければならないものは、大いに苦しんでいこう。そ

して、やるべきことを一つひとつやっていこう」と書いておられますが、それこそ、いのちみな生きらるべしというそのいのちを、本当に日々の中でお互いに生きていこうということなのです。そのことだけが、本当に確かな手応えのある生き方を我々に与え、実現してくれるということです。

非常にまとまりの悪い話になりましたが、私の話は忘れてくださっても結構ですから、どうかこのリルケの「いのちみな生きらるべし」という言葉だけはぜひ覚えておいてください。これから先、生きることにいろいろ悩まれ、苦しまれることがあるでしょう。けれども、この「いのちみな生きらるべし」という言葉を覚えておけば、生きていく道は必ず教えられると思うのです。我々を生かしているいのちは、実は「いのちみな生きらるべし」といういのちだということを、どうか大切にしていただきたいと思います。

それではこれで終わらせていただきます。

――一九八八・七・二六――